

# 博物館だより



山水六景詩画屏風（六曲一双 左隻 右隻部分）寺島藏人（應養）画

寺島藏人は江戸時代後期の高岡町奉行（享和3年就任～文化3年免）で、町民に時刻を知らせる時鐘の完成など高岡の町の発展に尽くした。一方、秀でた画家であり、應養の画号で山水画の優品を多く残している。

## 博物館特別講座

### おもちゃ・わらべ歌の100年 —小さい子供たちの文化—

講師 小沢昭巳氏

#### 〈おもちゃと子供〉

おもちゃ・わらべ歌・子どもの画など、小さな子どもたちの文化には、何か不思議な、忘れられない美しさが潜んでいる。

現在、博物館では「おもちゃの今・昔展」が開かれているが、先日博物館で伺った話では、今でも緑日の露店に並んでいるのは、ビー玉やメンコやオハジキやヌリ絵。不思議に昔と変わらない。長い年月をかけ、子どもの目で選び抜かれた品々なのであるということである。今回の展示では、手軽で値段も安いそれらのオモチャは、「縁日玩具」と名付けられている。展示ケース内には、「紙の絵日傘」「日光写真」「家族合わせ」などがぎっしり並んでいる。

ところが、それとは全く異なったオモチャの世界もあるという。数万円もするテレビゲームやラジコンロボットのセット。それらは、昭和50年ごろから登場し、子どもたちの人気を集めてきた。オモチャには、時代のコピーという面もあるというが、「流行玩具」と名付けられたコーナーには20年代、軍需廃材の砲弾箱の杉材で作られた羽子板や30年代にテレビ漫画で活躍した「鉄腕アトム」「鉄人28号」などブリキのキャラクター人形。40年代のプラスチック製レースカーやリカちゃん人形。そして、50年代以降のコンピューターゲームも並んでいる。またデラックスなりカちゃん人形を見ていて思うのだが、その一時代前の人形は、もっと素朴で温かく、オンブしたり、ダッコしたりできる人形であった。幼い日々、そんな人形をとても大切にして、「お母さんごっこに夢中でした」と博物館の人も話してくれた。

オモチャには、子どもたち自身のあるいは親の子どもに対する夢や願いが託されていた。「魔が去る」という言葉から「猿」をかたどり、七転び八起きを願う心から様々なダルマが作られた。江戸時代、全国各地には、その土地の暮らしを反映した地方色豊かなオモチャが多く生まれ、それらは旅の土産品となって全国に親しまれた。これが「郷土玩具」である。「郷土玩具」の展示コーナーには、母親と赤ちゃんとが糸で結ばれる「乳呑み」(京都)、姫の身代わりで病を得て亡くなった「奉公さん」(高松)、長崎の「オランダさん」などの郷土人形が並んでいる。子どもの厄除けを願って刻まれた高岡の「獅子頭」も展示されている。これらの郷土玩具こそオモチャの原点であろう。

#### 〈わらべうた考〉

子どもたちの素朴な「わらべうた」も、村の畦道や町の路地から次第に消えてゆく。

かつて、子どもたちは、わらべうたの豊かな実りの中

に暮らしていた。子どもたちは、畦に立って風や鳥のうたを歌い、路地のどぶ板を踏みならして「かごめかごめ」を歌っていた。風や鳥のうたは村の子たちのものであつたし、様々な遊戯うたは、町の子たちのものであった。子どもたちは、声を張り上げ、心ゆくまでそれを歌い、歌うということのはかな情感にひたっていた。路傍に生まれたそれらの歌は、野放図で泥臭かったが、真に澄んだ旋律を持っていた。子どもの自然な地声で歌われたからか、言葉というものの素直な形がそのまま写されていた。すうっと飛んで来て、ふうっと口の端に宿ったとでもいうような親しさがあった。

かってうれしい 花いちもんめ  
まけてくやしい 花いちもんめ  
となりのおばさん ちょっとおいで  
鬼がこわくて こられません  
お董をかぶって ちょっとおいで  
それでもこわくてこられません  
あの子がほしい この子がほしい  
相談しましょ そうしましょ……

「花いちもんめ」は、今もかろうじて残っているわらべうたの一つ。二組に分かれた子どもたちは、向き合って手をつなぎ、交互に歌って前後に動く。“そうだんじよう”で列ごとに丸くかたまり、互いに相手の組の一人を指名。指名された子たちは、前へ出て腕を組み、ケンケンをして回る。回り終わってジャンケン。負けたら失点となって相手組の方へ移される。片方にだれもいなくなるまで、それを繰り返す。

ところで、この遊びでは、得点だけが目当てではないらしい。むしろ失点になって相手の組へ移されることの方を喜んでいるかに見える。他へ移って別な子と手をつなぐということのスリルが情感を高めるのかも知れない。遊びの心理面ばかりではなく、歌の詞章そのものの意味もよくわからない。まず、「花いちもんめ」とは何を指しているのだろう。

わらべうたの詞章は、文字で記された言葉ではなかった。口からじかに歌い出された言葉なのだ。“花いちもんめ”という言葉にも、初めは何か意味があったのかも知れない。ところが歌い出された言葉の「音」だけをたよりに歌い継がれていくうちに詞章がくずれ意味が風化してしまったのかもしれない。意味の風化した言葉にはイメージしかない。イメージだけが連鎖して、何か妖し



い錯綜を作ってしまったのではないだろうか。したがって、口まねで歌い継がれるうちに、一つのうたには、いくつもの類歌（バリエーション）が派生してしまった。これは、伝承童話（わらべうた）の特質で、作者の明確な一般の童謡や唱歌には見られない現象がある。むしろ、わらべうたは、絶えず歌い替えられることによって生命を保ってきたといえるかもしれない。

「花いちもんめ」は、もとは京都あたりを発祥としたわらべうただといわれている。ところが、“となりのおばさん ちょっとおいで……”という部分もまた江戸・東京あたりを発祥とする古い「子もらい歌」だとされる。「子もらい歌」というのは、「花いちもんめ」と同じように歌いながら子をやり取りする遊びの歌。

したがって、その関東系の「となりのおばさん……」が、ある時期に「花いちもんめ」の中に吸収されたと見ることができるだろう。越中・富山県内にも、大正の中ごろまでは、古い多くの「子もらい歌」が残っていたのだ。

だっか だっか はい来い 何ちゅがほしい……お竹ちゅうがほしい……  
むこむこ来いや 何ちがほしい 何々ちがほしい 何で 育てよ まんじゅで育てよ……

ところが、やがて「子もらいうた」の無数の群れの中から、「花いちもんめ」一曲を選び出し、あとのすべてを忘れてしまう。「花いちもんめ」という、その言葉のイメージの豊かさと言葉の響きの美しさのとりこになってしまったのである。子どもの感性に潜む強力な美的選択力なのである。

「花いちもんめ」の類歌の中に次のような一節を持つものがある。

ふるさともとめて 花いちもんめ……  
この一節の“ふるさと”という言葉は、それだけでさらに次のような類歌を呼び起す。

ふるさともとめて 花いちもんめ  
大阪 京都で 花いちもんめ  
ふるさともとめて 花いちもんめ  
白砂糖もとめて 花いちもんめ  
黒砂糖もとめて 花いちもんめ

先の歌は、“ふるさと”（故郷）の意味に発した連想。後の歌は“ふるさと”（フルサト）という音から来る連想だったのである。

今、記してきたように、わらべうたには類歌が無数にあって、決まったテキストというものはない。どれを選ぶかは子どもたちに任される。ところが一つのグループがあつて、その中でいつも歌っていると、歌は自然に調整され、一つの歌に固定する。そして、そのグループが他のグループと交流することによって、歌はさらに大きな広がりの中で調整される。歌は、子どもの交流圏と重なるのである。大人たちについてやって来た子どもたちは、そこで「花いちもんめ」や「通りゃんせ」など、様々なわらべうたの遊びに花を咲かせていたという。

#### 〈児童画〉と〈童画〉

子どもの画は、ふつう、児童画と童画に分ける。「児

童画」とは、直接に子ども自身が描いた画であり、「童画」とは、絵本の画などのように、大人が子どものために描いた画だ。

児童画と童画とは、それぞれ別な変遷を遂げたが、大正の時期、この両者は交叉して重なった。しかし、それは間もなく離れ、それぞれ独自な展開の方向をたどることとなる。

ここでは、両者の画が交叉する大正中期までの児童画と童画との変遷をたどって見よう。

まず、児童画では、明治の時代には、臨本（画の手本）を丁寧に写す臨画が全てであった。大正に入ると、臨本の範囲が広がり、規定のお手本から、雑誌の口絵や絵葉書など多彩になった。しかし、最も大きな影響を与えたのは、画家山本 勝の提唱による「自由画運動」で、臨画を廃し、子どもの見たままを自由に描かせようとした。こうして、子どもたちは臨本の伝統的美意識や大人向きの技法に制約されず、子ども自身の表現で描くことができるようになった。

次に、「童画」の変遷をみると、江戸時代に普及した「おもちゃ絵」、「手遊び絵」などの木版一枚刷版画が出发だった。特に子どもを意識して制作されたものではなかったが、子どもの心をそそる情感があった。明治へ入ると、次第に石版や亞鉛版に変わり、巖谷小波の「日本昔懐」「西洋昔懐」などの雑誌に子ども向きの挿画となつて登場した。明治の終わりから大正の初めにかけ、雑誌「日本少年」の表紙画を描いていた竹久夢二の画が、子どもたちを始め、各層の人気を集めようになった。竹久夢二の画については、文芸史家瀬田貞二氏が、「かの生涯の美しい愛とその死のあいだに、いつも子どもを主題とし、子どもに語りかける詩や画を描いているのは、彼が子どもを自己内奥の故郷と思っているしではなかつたか」と記している。（「落ち葉ひろい」）

夢二が子どもの世界に抱いた关心は、このころ、子どもの雑誌に画を描いていた作家たち、武井武雄や宮崎与平、清水良雄（雑誌「赤い鳥」）、岡本帰一（雑誌「金の船」）にも強い影響を与え、これらの作家たちの共同願望のような形で、「童心主義」と呼ばれる芸術思潮が生まれ出されてゆく。「童心主義」は、子どもを純粋に見るあまり、感傷に溺れるという弱点を持つ。しかし、子どもの心に独特な世界を見出し、それを積極的に認めようとする姿勢を有していた。

童心主義の風潮は、先に記した「児童画」の世界にも強い影響を与え、自由画運動によって解放された子どもたちは、この時代、竹久夢二の画集・挿画を始め、童心主義に立つ作家の作品を模倣し、ここに、「児童画」と「童画」とは深く交錯するのである。

しかし、こうした芸術観は、学校教育の許容するところとならず、次第に停滞の方向をたどり、児童画は形式化・技術化し、「写生画」、「静物画」に固定化し、「童画」との距離を大きくしてゆくのである。

（高岡市万葉歴史館研究員）

平成7年9月2日開催 博物館講演会より

## 博物館特別講座

### 安居寺の歴史と姿

講師 大谷龍寶氏

#### 1 安居寺の創建

縁起によれば、養老2年（718）インドより渡来した善無畏が、本尊聖觀世音菩薩を携えて俱利伽羅山を降り、紫雲たなびく安居の地に辿り着いたその時、一人の老翁が現れ、「この地はあなたが背負っている觀音様が永く安置されるのにふさわしい土地です。」と、告げると同時に姿が見えなくなってしまった。びっくりしてあたりを見回すと地蔵様がお祀りしてあった。善無畏は改めて礼拝しなおし、「地主地蔵」と名付けて両尊を一夏九旬の間安居し、草堂を結んだのが安居寺の開山と伝えている。

本尊の聖觀世音菩薩（国指定重要文化財）は、釈迦自身が母摩耶夫人の追善のために一刀三礼して彫ったものと伝えられ、たいへんありがたい觀音様である。しかし、歴史的にみて釈迦がなくなってから200～300年位たたないと仏像が出てこないのである。

これは、私達が「六道輪廻」といって、地獄・餓鬼・修羅・畜生・人界・天上の六つの世界を廻っており、ここで何か功德をつんだり特別の修行をしたりすると、六道から離れて仏様の世界へ行くことができる。従って、現世で痕跡を残したらいけないという考え方があり、例えば写真をとられたり、その人の姿と思わせるものが現世にあると、せっかく仏様の世界へ行けるチャンスがあったとしても、また六道輪廻の世界をぐるぐる廻らなければならぬことになる。一般の人でもそうなので、ましてや聖者といわれる人たちの姿・形というものをこの世に残してはいけないという考え方方が強くあったので、釈迦がなくなられた後でもすぐには仏像が作られなかつた。そこで、仏像のない時代は法輪や菩提樹などの物や記号をシンボルとして拝んでいたが、釈迦の死後200～300年たってから、ギリシャ文化と融合したガンダーラ仏教美術の手法を受容して仏像が作られるようになった。

インドからの仏教渡来については、森 浩一（同志社大学教授）が朝日グラフ（昭63.9.2号）掲載の「交錯の日本史」の記事の中で、「天竺僧のひらいた寺」と題していると考察している。これによると、善無畏が聞いたという伝説の寺が福野の安居寺、七尾の光善寺、俱利伽羅山の不動寺など、大きくとらえると日本海沿岸に点在していることに着目している。日本への仏教伝来はインド→中国→百濟→日本という、いわゆる仏教公伝の形のほかに、別ルートの伝來があったのではないかと推察している。それで、日本海沿岸に善無畏伝説の集まっていることについては、遣唐使の一員として長安に渡り、善無畏に学んで帰朝した道慈が善無畏伝説の化身ではないかと述べている。

安居寺の寺名「安居」は仏教用語の一つで、地名とし

ては「安居」と書いて「やすい」、地元の人達は少しまって「やっすい」と呼び、「やっすいの觀音様」として親しまれている。また、「あんご」という言葉は俳句の夏季語としてあり、「夏の安居」と書いて「げあんご」ともいっている。もともとインドの原始佛教教団で、毎年雨期になるとグループ毎に集まり一年間の反省をしたり、仏教研究をしたりするといった合宿研究会のようなものを「あんご」といっている。善無畏もこの安居の地で、一夏九旬の間安居され、寺が始まったということで、「安居寺」と名付けたといわれている。

#### 2 真言密教の伝播

平安初期の延暦25年（806）、空海は真言宗（密教）を開き、皇室や貴族の信仰を集め、新しい国家仏教として発展していった。安居寺もこの真言宗の密教的影響を受け始め、鎌倉時代以降に再興された後は、密教寺院としての性格を強めていったようである。

真言密教では独特な法具類や仏像・仏画が発達したが、中でも、「十二天画像」が大事で、真言宗の寺としてやっていく時にまず最初に十二天の図を揃えなければならない。それは「灌頂」という重要な儀式を行う際に、十二天を描いた屏風で周りを囲い、受者と儀式そのものの守護を願うために絶対に必要なものなのである。

ともかく、たいへんありがたい觀音様ということで聖武天皇が使いを出されたとか、また、平安時代には安居の山谷に24もの支坊が建っていたとかいわれている。

#### 3 中世の安居寺

中世に入ってから様々な争乱に合い、支坊も次々に焼失し、今は興法寺・安養寺などの地名として安居寺近隣の市町村に残っているにとどまっている。しかし、争乱の続く間はご本尊だけは、一里程離れた山の奥の方に疎開していく難を免れている。

尚、中世の文学史上で有名な兼好・宗祇・西行といった一流の文人たちが、風光を愛でてこの安居寺へ訪れて来たといわれ、次のような歌を残している。

「世の中に秋田刈までなりぬれば

露もわが身も置きどころなし」  
（兼好）

「影や水山は かすみの朝みどり」  
（宗祇）

「山里は鹿の音までも

世をすさめたる 気色なる哉」  
（西行）

鎌倉時代には、一遍上人の開いた念佛の一派とされる時宗が新湊の放生津を中心に拡がったが、時宗のご本尊の見返阿弥陀像（県指定文化財）がどんな経緯か当寺に安置されている。この仏様は来迎の阿弥陀さんで、西方淨土への道案内のため後へついてくるかと心配しながら振り返り、西の方へと導いてくださるといつてもいい。これがたいお姿の仏様である。このような姿のものは全国的に珍しく、5～6体しか残っていないといわれている。

全体的に、争乱で仏像・仏画や古文書などが焼失しているが、室町時代以降少しずつ復興してきている。



#### 4 加賀藩の保護

江戸時代には加賀藩の手厚い保護もあって、現在の姿にまで復興してきたといえる。

特に、加賀藩の重臣岡島備中守一吉の夫人（法名月清大姉）が、本尊の聖觀世音菩薩への信仰が篤く、当寺を参詣するとともにいろいろと寄進している。一つは觀音堂（県指定文化財）であり、また、庫裏の裏にある慶長4年在銘の石灯籠（県指定文化財）も一吉の名で寄進しており、年号のわかるものでは富山県で最も古いとされている。

月清大姉は中院通枝公の息女で、甥にあたる中院通村が月清大姉の33回忌の追善に「般若心経」を写経して奉納している。また、「安居寺八景和歌」も奉納されており、これは、中院家の通躬公の門弟である権律師慶秀法師というお坊さんの書いたものである。

加賀藩前田家自体も安居寺を祈願所とし、祈願料・建物や山林境内地などを奉納している。安居寺の寺紋が加賀梅鉢の紋であることをみても、加賀藩の保護の手厚さがわかる。3代藩主利常が、夫人珠姫の安産祈願に奉納したと伝えられる大きな絵馬3枚（県指定文化財）が觀音堂に掲げてある。秀吉の聚楽第の板戸であったといわれ、絵師は狩野永徳・山楽師弟といわれている。

また、觀音堂については何度か改築修理工事を行って

おり、昭和61年の修理工事中に、天保10年（1839）に大修理した様子を記録した棟札が発見されている。これによると、内陣の改造・天井彩飾・内外の釘隠の取り付け・腐朽破損箇所等の補修を行ったと記入してありかなり大掛かりな修理だったことを物語っている。この時、以前には内陣と宮殿の境がなかったが、虹梁・組物・蟇股・欄間等で新しく造り朱色に塗り上げたこともわかつてきただ。

尚、蟇股には三ツ葉葵の紋が刻んでおり、これは徳川11代將軍家斉の息女洛姫が加賀藩13代斉泰の正室であったためではないかといわれている。

現在は、真言宗寺院の殆どは世襲の形をとっているが、2～3代前までは代々弟子のうちの誰かが後を継いでいた。従って、今は何代の住職でなく、その住職は何世というように呼んでいる。

#### 5 観音信仰と靈場巡拝

聖觀世音菩薩の33年毎の御開扉や觀音靈場の33ヶ所といった觀音様と33という数字は、切っても切れない縁がある。それは、觀音様が33に姿をかえて人々を救ってくれるという信仰があるからである。

前田利家の兄といわれる安勝という方もたいへん觀音信仰が篤く、安居寺住職宗祐と相談して当國（富山県）33ヶ所觀音靈場を決めている。1番安居寺から始まり、33番法福寺（宇奈月町）に至る33ヶ寺である。また、10数年前に北陸広域觀光推進協議会が、福井・石川・富山の各県から11ヶ寺づつ選出して北陸觀音靈場を決めている。

このような靈場巡拝ということで、安居寺へも遠く関西や東海地方からたくさんの方が参詣に来られる。

（安居寺35世住職）

平成7年10月28日開催 博物館講演会より

## 平成7年度 事業一覧

### (1)企画展「絵図にみる觀光名所」—吉田初三郎の世界—

4月8日(土)～6月18日(日)

吉田初三郎（1885～1955京都生まれ）の描いた鳥瞰図は当館にも収蔵しており、原画の所在調査を開始し、念願の企画展として原画・印刷折本・絵葉書など約80点を展示公開することが出来た。会期中は、県内はもとより県外からの入館者も多く、全国的な関心を集め、終了後も未だ問い合わせがあり、当分の間、初三郎ブームが続くことを予感させた。  
(入館者数5,125人)

### (2)企画展「おもちゃの今・昔」

一玩具の移り変わりとその時代背景—

7月5日(水)～9月24日(日)

おもちゃは、いつの時代でも子どもたちに夢と好奇心を掻き立ててくれる。本展では、おもちゃを流行・郷土・縁日玩具の3種類に分類し、約400点を展示。夏休み期間中に開催したことから、親子連れの入館者が多く、また、遊びコーナーも設け、昔懐かしいめんこや独楽回しなどを楽しんで行く子供たちも多かった。  
(入館者数9,293人)

### (3)特別展「安居寺の文化財」—越中古寺の至宝—

10月10日(火)～12月17日(日)

養老2年（718）の開山と伝えられる弥勒山安居寺は、福野町にある越中の古刹である。近世期には、加賀前田家の祈願所として栄え、加賀藩が寺領や觀音堂・仁王門を寄進するなど手厚い保護を受け、多くの信仰を集めた。

本展では、日頃見ることの出来ない県指定文化財の「聖觀世音菩薩立像」などの仏像や仏画・書跡・法具約100点を展観し、多くの来館を得た。(入館者数7,582人)

### (4)企画展 マイ・コレクション「家庭電化の移り変わり」

平成8年1月15日(月)～3月20日(水)

生活の必需品である家電製品を個人コレクションにより大正期から昭和60年代まで、年代を追って約130点を展示。大正末期の古いラジオや昭和30年代の「三種の神器」といわれた白黒テレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫などを紹介し、家庭における電化生活の推移を再認識するとともに電力依存の今日の暮らしを考える機会とした。

## 企画展「絵図にみる観光名所」を振り返って

—吉田初三郎の世界—

博物館が収蔵する歴史資料の中に一枚の鳥瞰図がある。昭和7年に吉田初三郎（明治17年～昭和30年）が来高し描いたもので、以前に旧高岡市役所議場の一隅から発見されたものである。

一昨年の10月頃、ある雑誌に「大正の広重—吉田初三郎」という特集が掲載された。博物館として、いつかは吉田初三郎の展示を実現してみたいと永年考えていたこともあり、これを機に初三郎展開催の可能性を調査することになった。

吉田初三郎は、京都に生まれ大正末期から昭和初期に起こった観光ブームの中、鳥瞰図主体の観光パンフレット・絵葉書などを描き続けた画家で、初三郎式鳥瞰図は厳密な遠近法を用いず巧みに細部を弯曲させ、幾十枚幾百枚のスケッチをもとに部分部分の自然描写を統合し、再構成して描いた色彩豊かなパノラマ世界である。

初三郎式鳥瞰図については、いろいろ調べてはみたが、どこの館でも本格的展覧会の前例がなく、手掛かりになるのは、市内の所蔵家の約20枚の印刷版鳥瞰図と京都府立総合資料館がコレクターから寄贈されたという200数点の印刷版鳥瞰図とその目録であった。とにかくそのうちの数十点（絵葉書を含む）の借用を京都府立総合資料館に依頼した。

調査開始後、早速富山市に原画があるとの情報を頂き、市内のカナル会館で岩瀬を描いた原画（昭和11年）を確認したが、県内の他作品の所在がつかめず、京都府立総合資料館の印刷版鳥瞰図に描かれている場所を手掛かりに、石川・福井など近隣の官公序をはじめ、関西方面の観光地付近の社寺や博物館などへ原画の所在を照会したところ、武生市の原画（昭和8年頃）所蔵と福井県立博物館の印刷版所蔵（同年頃）がわかつてきた。また後々には石川県鳥瞰図原画（同7年頃）を石川県序より借用できた。更に観光地関係での調査領域を広げ、長野電鉄（昭和4～5年頃の原画）と軽井沢町に原画（昭和9年）を所蔵しておられる福井の高校教諭吉川侃利氏よりお借りすることができた。

しかし、展覧会を開催するには、まだ資料・情報とも不足で悩んでいたところ、先の特集を組んだ雑誌編集部から京都在住の初三郎関係者・阿瀬太紀氏を教えて



展示会場



瀬戸内海遊覧絵図 部分 (大正10年頃) 当館蔵

頂き、阿瀬さん自身が数点の原画と他にも手紙や写真等の資料をお持ちになっているということで、本展の開催に踏み切ることになった。

阿瀬さん宅には樺太（サハリン）、青森、宮城、京都などの多くの鳥瞰図があったが、富山地鉄発注の鳥瞰図もお持ちであった。長野電鉄より紹介を受けた東京の鳥瞰図研究家・藤本一美氏からは愛知県内の刈谷市・一の宮市立農島図書館・犬山の寂光院・京都の醍醐寺他コレクターの方々をお教え頂き、調査は更に前進した。その結果愛知県犬山市鷺尾山麓に初三郎が昭和初期に滞在しており、初三郎のポスターや弟子の金子常光の資料などが近辺にあることもわかった。その後事前に原画の所蔵確認のできていた神岡町へ赴いたところ、それが二代初三郎の鳥瞰図（昭和31～32年頃）とわかった。また、鳥瞰図の参考資料としては、鉄道資料や絵葉書類をコレクションしておられる福井の高校教諭吉川侃利氏よりお借りすることができた。

一枚一枚の鳥瞰図を説明する上で有効だったのは、印刷版鳥瞰図の裏に書かれた当時の観光地の様子を記す文字と初三郎の「絵にそえて一筆」の一文。これにより初三郎の当時の足跡が実証できた。しかしこれは、彼の日本国内はもとより、朝鮮半島・中国東北部・台湾・樺太（サハリン）までも足を伸ばして鳥瞰図を描いた大旅行のほんの一部である。初三郎の鳥瞰図は平面的な地図よりもデフォルメされているが、立体的で、あたかもその場所を目前にしているような錯覚に陥る。広島、長崎や平壌など第二次世界大戦や朝鮮戦争の戦災にあった都市の以前の状況が手に取るように読みとれる貴重な歴史資料である。

当館所蔵の一枚の鳥瞰図（原画）から端を発し、全くの手探りで調査・企画した展示ではあったが、多くの方々のご指導・ご協力を得て開催にこぎつけることができた。展示期間中は関方面からの地図関係の専門家や愛好家はじめ各地の歴史博物館、図書館からの来館、問い合わせがあり全国的な反響を呼んだ。また展示終了後今に至るまで、解説図について全国から問い合わせがあり、企画展「絵図にみる観光名所」—吉田初三郎の世界—の余波の意外な広がりに驚いている。

(学芸員 野口充子)

## ■購入

吉田初三郎鳥瞰図（印刷折本）

「富山市」富山県鳥瞰図	(歴史資料)
「富山県」富山県鳥瞰図	(タ)
日本八景名所図絵	(タ)
朝鮮大図絵	(タ)
塩原電車沿線名所図絵	(タ)
小樽市鳥瞰図	(タ)
日本を中心とする世界の交通鳥瞰図	(タ)
宮城県鳥瞰図	(タ)
觀山頂上一目八方鳥瞰図	(タ)
京都名所大鳥瞰図	(タ)
大連鳥瞰図	(タ)
名古屋市鳥瞰図	(タ)
京王電車沿線名所図絵	(タ)
長野電鉄沿線温泉名所案内図絵	(タ)
嵐山名所図絵 保津川下り	(タ)
別府温泉御遊覧図絵	(タ)
別府温泉御案内図絵	(タ)
法隆寺名所図絵	(タ)
秩父鉄道沿線名所図絵	(タ)
大和尚山・金州図絵	(タ)
長門海峡鳥瞰図	(タ)
越中国鉄物細工之図（大日本物産図絵）	(産業資料)
山水六景詩画屏風（寺島應養画）	(歴史資料)
他参考文献5冊	
焼型鋳銅三足燭台（一対）	(産業資料)

## ■寄贈

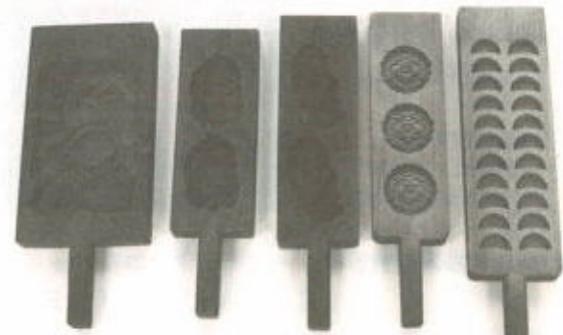
銅器下図一式576枚	(産業資料)
ウイーン万国博覧会進歩賞 證状	(タ) タ
フィラデルフィア万国博覧会 嘉賞 證状	(タ) タ
フィラデルフィア万国博覧会 嘉賞 證書（英文）	(タ) タ
フィラデルフィア万国博覧会 嘉賞 謹告	(タ) タ
フィラデルフィア万国博覧会 證状	(タ) タ
第1回内国勧業博覧会 嘉賞 謹告	(タ) タ
第1回内国勧業博覧会 嘉賞 證状	(タ) タ
パリ万国博覧会 證状	(タ) タ



フィラデルフィア万国博覧会 嘉賞 證状（金森宗七）

第2回内国勧業博覧会二等有功賞 證状（産業資料）金森健造氏

第3回内国勧業博覧会 嘉賞 牌	(タ) タ
内国勧業博覧会 嘉賞 牌	(タ) タ
京都府博覧会 牌	(タ) タ
ウイーン万国博覧会 有功賞牌	(タ) タ
フィラデルフィア万国博覧会建国100年祭記念牌	(タ) タ
第2回内国勧業博覧会二等有功賞 牌	(タ) タ
ニューヨルンベルヒ府金工博覧会 牌	(タ) タ
世界戦役講和条約調印記念 牌	(タ) タ
米国渡航証	(タ) タ
取引控	(3通) (タ) タ
礼状（松島高岡市長より）	(タ) タ
日本鳥瞰中国・四国大図絵（初三郎）	(歴史資料) 川田外二氏
日本鳥瞰近畿東海大図絵（初三郎）	(タ) タ
兼六園（初三郎画）	(タ) 古谷昭史氏
伏木修築工事竣工記念絵葉書（4枚）	(タ) 望月 保氏
伏木測候所写真絵葉書	(1枚) (タ) タ
高岡産業博覧会前売入場券	(1枚) (タ) タ
日本海横断航路絵葉書	(1枚) (タ) タ
伏木港絵はがき	(5枚) (タ) タ
富山絵はがき（初三郎）	(5枚) (タ) タ
日満露支交通国境大地図	(タ) タ
算術学習帳	(民俗資料) タ
伏木港	(冊子) (歴史資料) 堀田光子氏
高岡博会場案内図	(タ) 藤本一美氏
高岡市特産品案内	(タ) タ
黒部峡谷と宇奈月温泉鳥瞰図（金子常光）	(タ) タ
煎餅焼ごて	(産業資料) 吉田恒治氏
煎餅焼具	(6点) (タ) タ
ポン煎餅焼具	(タ) タ
菓子木型（落雁・あん菓子用）	(35点) (タ) タ
飴菓子型（木型・金型）	(25点) (タ) タ



菓子木型

和文タイプライター	(民俗資料) 西田 弘氏
ガスランプ	(2点) (タ) 川田外二氏
年中行事双六	(タ) タ
引札「船問屋 丸田庄吉」	(歴史資料) 中條義一氏

## 平成8年度 展示紹介 (平成8年4月~9年3月)

### ◆企画展「新収蔵品にみる郷土資料」

4月12日(金)~6月30日(日)

越中文化発祥の地、高岡は古くから商業と美術工芸の町として広く知られている。その郷土における人々の暮らしの移り変わりや産業発展の様子を新たに収藏した高岡銅器関係資料、高岡町奉行・寺島蔵人資料などの新収蔵品を通して紹介する。



高岡産業博覧会場図  
(昭和26年)

### ◆写真展「高岡古城公園の四季」

7月12日(金)~7月21日(日)

第13回全国都市緑化とやまフェアの開催に因み、市内の写真家が移り変わる古城公園の四季の様子を撮影し作品を展示。

### ◆彩りとやま緑化祭'96記念

#### 特別展「古九谷と屏風絵」(仮称)

8月1日(木)~9月1日(日)

第13回全国都市緑化とやまフェア開催を記念して、花鳥や草花文様の描かれた近世古美術品を選び、伝統文化の美の世界を紹介する。

石川県立美術館所蔵の加賀藩前田家伝来の名品はじめ、富山・石川両県内に所在する大名調度品・花鳥図屏風・能装束・武具などの数々を「絢爛と寂」「幽玄と華麗」「抒情美」の3つのテーマにより展示公開する。

#### 〈主な出品内容〉(予定)

古九谷平鉢・吉田屋窯色絵盃洗・草花文蒔絵貝覆・城端蒔絵見台・加賀宝生能衣裳・銀象嵌武具・水車図屏風など。



「色絵牡丹文平鉢」  
江戸時代・17世紀  
(石川県立美術館蔵)

### ◆企画展「加越老舗百年」—高岡・金沢の商い—

9月18日(水)~12月1日(日)

加賀藩初代藩主・前田利家が天正11年(1583)に金沢へ入城して以来400年余、今も当時の面影を残す古い町並が所々に見うけられる商都・金沢は加賀藩お抱えの職人や御用商人達が何代にも渡って育んだ伝統産業や豊かな加賀文化を受け継いで、今日まで発展を続けてきた。

高岡は金沢に遅れること26年、二代藩主・利長によって開かれた町で、藩の保護政策の一方で、常に厳しい監

督下に置かれながらも、産業の振興を図り、今日の商工都市・高岡へと成長してきた。

この両市の交流の一環として、いわゆる老舗に代々伝えられてきた看板・道具類・引札・写真などの貴重な民俗資料や産業資料を展示し、両市の商業活動の足跡を振り返る。



島崎宗平店 引札 (明治30年)

### ◆企画展「収蔵品にみる高岡資料」

12月17日(火)~1月26日(日)

収蔵資料を紹介する展示の第2期として、高岡に関する歴史資料・考古資料・民俗資料などを展示。桜谷古墳出土品・前田利長書状・渾天儀など。

### ◆企画展「音響文化の移り変わり」

ー甦る明治・大正・昭和の響きー

平成9年2月7日(金)~3月20日(木)

19世紀に発明され、娯楽の少なかった時代のぜいたく品であった蓄音機から現代のオーディオ機器まで、明治・大正・昭和に至る音響機器の発達・変遷を個人コレクションを通して紹介し、併せて各時代の世相・風俗を物語る写真や記事なども展示する。



エジソン ホーム フォノグラフ (19世紀末)

## 郷土の歴史資料などの 情報を求めています。

歴史資料や生活資料は、社会の変遷や興亡の足跡を理解するうえでの貴重な文化遺産です。当博物館では、古文書・絵図・その他資料などの収集を行い、企画展に生かし皆様に見ていただきたいと思っております。情報がありましたら、是非ご提供をお願いいたします。